老嫗昔がたり

——大正六年八月某日記——

北野京二

何か昔の事を話せと仰せになるので御座いますか。その、昔の事……と申しますと、あゝ、左樣で御座いますか、私共の育ちました昔と、私共の孫が幼稚園へ通つて居ります今とを、御比らべになるので御座いますか。はい、それはもう、ものゝ六十年も經つて居りますことで御座いますから、何を申しましても隨分な變り方で御座います。

と申しましても、そんな……昔の幼兒の生活と幼兒に對する其時代の人の考へ方……と仰せになるので御座いますか、どう仕りまして、そんな面倒な事は、無調法者の私共にはとても申上げられは致しません。いゝえ、若い時にほんの少しばかり昔流の讀み書きを致させられました外には何一つ出來も致しませんのですもの、何の申上げる事が御座いましよう。

はい、いい……えゝえ、それでは折角の何で御座いますから、かう致しましては如何で御座いましよう。私は若い時から大變に繪が好きで御座いましたから、子供の時分から私がしよつちう見て居りました古本の挿繪や又は錦繪などを、いろ〳〵と思ひ出しまして、何か子供を畫いた繪をかれこれと御目にかけて、ほんのわづかばかり取り留めもない事を申上げる事に致しましようか。

□

私共の若い時には、よく『八十翁昔がたり』と云

ふ二冊もの丶本を讀みました。はい、其時分の事を思ひ出しますと、何事もなつかしく存せられます……前齒で小さく咬み切つた紅唐紙を、小さい爪に受けて分らない字に貼りつけたり、挿繪に紅をさしたりして、御しまひには此の御本をだいなしに致しまして母に叱られましたが、其御かげで昔からの風俗の移り變りなどに、自然と氣を付けるやうになりました。此の本は天保五年（今から八十年前）の出版で御座いまして、これを書きました新見傳左衞門と云ふ老人が其時に八十歳と云ふので御座いますから、つまり享保の初め頃に生れた人が寛延あたりの事を中心として、其見聞を書いたもので御座いましよう。

いゝえ、飛んでもない、私が其眞似を致さうなど丶云ふのぢや御座いません。私はたゞ子供の繪を順に並べまして「覗きからくり」の糸をかたんと引く丈けで御座います。口上だつて別に申すのぢや御座いませんのですから……

□

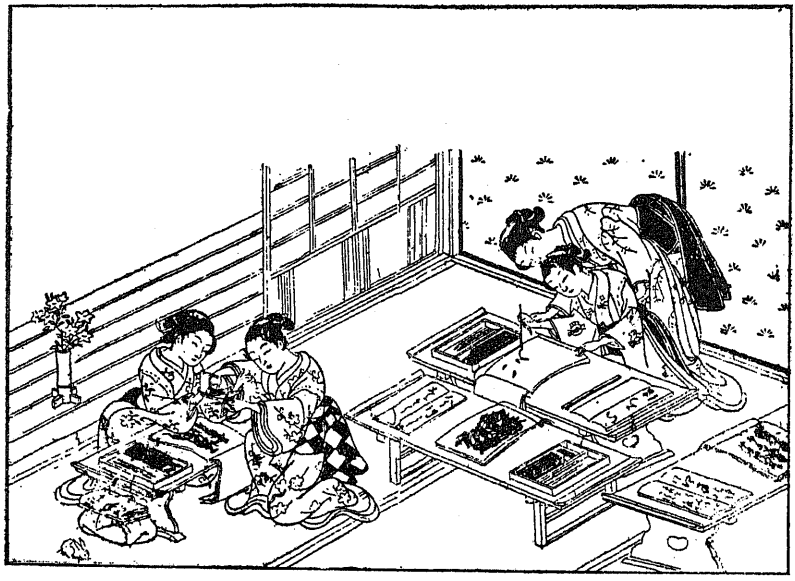
「今川になぞらへて自らを戒むる制詞の條々……」とすら〳〵と申して參ります内に、昔のなつかしさが夢のやうに浮いて參ります。私共が子供の時には毎日此の今川を讀ませられ書かせられたもので御座います。其時用ゐました本は、母が丹誠な仁で御座いましたから、蟲にも喰はせずによく保存して御座いまして、此の通り今でも手許に御座います。大變によごれて居りますけれど、此の本は安永九年（今から百三十七年前）に出た『繪本操節草』と申す二冊もので御座いまして、繪は有名な鈴木春信が畫いたもので御座います。當節の御若い方は滅多に御存じも御座いますまいから、先づ其中で女の兒が手習や綾取りを致して居ります圖を御目にかける事に致しましよう（第一圖）。此の繪にある一つの手本は「いろは」で御座いますけれども、もう一つのには「今川になぞら……」と書いて御座いましよう。手を取つて敎へて居り

ます娘の軟らかみや、綾取りを致して居ります子供のしなやかさは、どんな名人でも春信に及ぶものが御座いますまい。

□

しかし男の兒と女の兒の遊びを畫いた挿繪として、勿論空前で御座いますが、恐らくは絶後と申しましても宜しいかと思はれますほどに美しい作は、『伊勢物語』二十三を畫いた西川祐信の繪で御座いましよう（第二圖）。此の祐信の挿繪のある『伊勢物語』は寶暦六年の出版で御座いますから、

第一圖



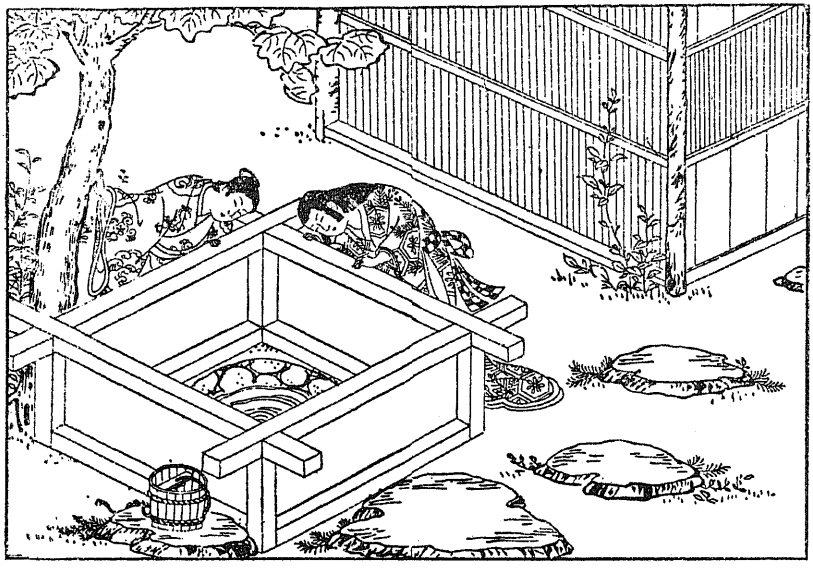
鈴木春信筆繪本操節草「よりよ」

今から百六十年も前の事で御座います。此の繪は御承知の通り「筒井筒」の歌と「振り分け髪」の歌の主の業平と有常の妹の小さい時の遊びを畫いたもので御座いまして、此の女の兒が後に「風吹けば沖つ白浪たつ山夜半にや君がひとり越ゆらむ」と咏んだ貞操な業平の内室になられた人で御座います。

一體此の繪を御覽になられた方は、餘りいろ〳〵と考へ過ごしを遊ばす事は禁物で御座います。例へば業平とか有常

の妹とか、筒井筒や振分髪と云ふやうな、挿繪めいた註釋ぢみた個人に關した事は御思ひにならないで……え、何と申しましようか、つまり……その、人間全體と云ふものを、子供を以て代表して畫きました繪として御覽に成つて、此の畫面から麗らかに燻じて來る美しい神々しい愛と云ふものに共鳴なさらないといけません。……何ですか御說教ぢみた事を申上げまして恐入りますが、つまり此の祐信の繪は、餘り出來が良すぎまして挿繪の領分をつき拔けたので御座います。

第二圖

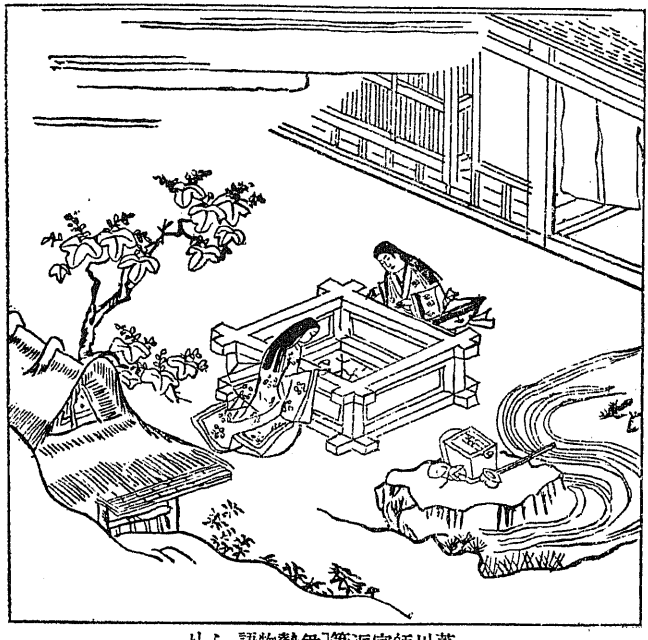


西川祐信筆「伊勢物語」より

其證據に、もう一つ此の筒井筒の繪を出しますから、よく比らべて御覽遊ばしませ。表紙もなく御終ひの丁も缺けて居ります爲めに、はつきりと分りませんが、たしか元祿前後の版の伊勢物語で『傳受入伊勢』と見かへしに題をつけた本が御座います。是には菱川派の人が挿繪を畫いて居りますが、其中から此の「筒井筒」の繪を出して御目にかけます（第三圖）元祿時代で御座いますから、

今から二百三十年も以前の事になります。今の祐信の繪とは六七十年も隔りが御座いますから、大變に感じが違ひますで御座いましよう。祐信の繪には人間と云ふ大きな意味がゆつたりと厚く一面に行き亘つて居りますが師宣派の繪は人形芝居のやうに、人物がかたこと〳〵と小刻みに動いて居りましよう。如何で御座います。説明がくどすぎるのと、餘り遠くから見すぎた爲めに、人間の味が薄く成つて了ひは致しませんか。

第三圖



菱川師宣派筆「伊勢物語」より

此の祐信の原圖は縱七寸二分横一尺五分もありますから、其まゝ飜刻致しましても立派な額面になります……□

小町の繪を見まして、若い時にいろ〳〵描きました幻や空想などが、どうかしますと今でも私の胸いろ〳〵の傳説もありそれに又美貌と云ふ事から、私共が若い時に口癖のやうに申しはやして居りました小野小町の繪が、どう云ふ譯で御座いますか不思議に私につきまとつて居ります。これは子供の繪とは丸で縁が御座いませんのですけれども、何かの御參考にもと存じまして態と申上げる事に致しました。

を騒がす事が度々御座います。

其時分には小町を畫いた繪がいろ〳〵御座いましたが、只今手許に殘つて居りますのは、兼良卿の『歌林良材集』と云ふ歌書の挿繪丈けで御座います。しかもこれが一番の私の氣に入りの繪で御座いました。此の本の出來ましたのは。文明十三年(今から四百三十六年前)で御座いますが、私の習ひました本は延寶七年(今から二百三十八年前)に奥村政信の挿繪で、江戸の鱗形屋から出版されたもので御座いました。

此の本に出て居ります小町の繪は、よほど不思議な畫き方で御座いましよう(第四圖)。顔の形に致しましても、七十年後の祐信のやうにふつくりした丸味がなく。師宜(政信)一流の西洋梨子のやうな變な恰好で御座います。姿に致しましても、百年後の春信などの畫風と違つて、しんなりした軟かみと云ふものがなく、いやにぎくしやく致して居ります。しかし凡そ抒情詩の挿繪として、人間と自然との交感をこれ位率直に畫き現はした繪が他に何處にありましよう……

此の繪の——女性の心と山川草木の心とが、恐ろしいほどに互に通うて居ります此の急所が、妙な空想的な感じを、若い時から私に起させたので御座いましよう。私は此の繪を思ひ出すと、すぐ柳が人に化けたあの三十三間堂のお柳の最後を思ひ出しました。又三十三間堂を思ひ出すとすぐ此の小町の繪を思ひ出しました。しかし……何と申しましようか、此の繪は柳の精とは反對に、人間の魂が樹の中にだん〴〵入り込んで、しまひには樹に化けるので御座います。小町がぴり〳〵と神經を慄はせますと、櫻の枝がゆら〳〵と動いて、梢の花がぴく〳〵と痙攣して居りましよう。如何で御座います、皆樣にはさう御見えになりませんか。

□

何ですか迷信ぢみた事を申上げまして恐入りま

す。何の所はどうか御遠慮なく御取り捨て遊ばして頂きます。それでは今度は御埋め合せと致しまして、元氣のよい御誕生の事を申しましょう。

御誕生の繪などは今から考へて見ますと、いくらも見ました筈で御座いますが一番面白いと存じて居りますのは、『義經記』の元祿版（今から二百三十年も前）の横本にある狩野派の辨慶誕生の圖で御座います。（第五圖）牛の牙は生れ落ちるとすぐよた〳〵と二足三足は歩むものと伺つて居りますが、此の繪で見ますと、辨慶は却々どうして牛の牙所の騒ぎや御座いません。産婆の致しますやうな事まで、自分一人でどし〳〵致して居たやうで御座います。

第四圖

奥村政信筆「歌林良材集」より

それから變つて居て面白いと存じましたのは、山東京傳の『あやつり』と云ふ黄表紙にある御誕生の繪で御座います。此の本は寛政五年（今から百二十四年前）の出版で、京傳が「現在舞臺上、前生樂屋高、因緣十二糸、忽引南京操」と云ふ氣の利いた序を書いて居ります。繪もやはり京傳が畫いたもので御座います。御承知の通り此の人は繪師としては北尾重政の弟子で、畫名を政演と申しました。上品な

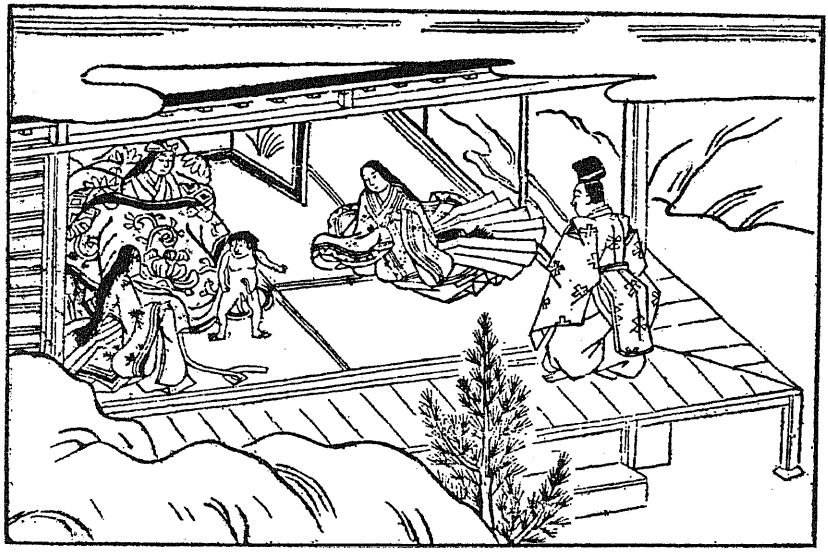
錦繪なども畫いて居ります

此の黄表紙は人間を南京操りに致しまして、舞臺にしつらへ、此の人間の善事惡事を操る佛と鬼とが、結城孫三郎一座の太夫のやうに天井の樂屋で一々糸を引いて居ります所を畫きましたもので御座います。例の善玉惡玉流の御定りの趣向では御座いますけれども、操りに致した所が一寸味が變つて居りまして面白いと存じます。今其御誕生の圖の樂屋内を御目にかけます

（第五圖）

此の繪の左に居ります佛樣は産婦を操つて居ります

第五圖



狩野派筆「義經經記」より

ので、前の丁の舞臺の圖には此の佛樣に操られて居る産婦が出て居ります右に立つて居ります佛樣は、これから生れやうと云ふ赤ん坊を持つて居りまして、いざ御産と云つたらすぐこれを舞臺へ降さうと云ふ所で御座います。下界では未だ生れないのに、天上ではちやんと男の子が出來て居ります所が面白いぢや御座いませんか。寸善尺魔と云ふやうな事を、よく子供の時に御婆樣に聞かされて居りました、妙に因緣話の好きな私には、此の

黄表紙が堪らないほど面白う御座いました。おや復、思はず知らず因縁話になりました……

□

今度はどうぞ、そちら様から題を御出し下さいますやうに、はい、それを御受けして……

と申しますと大ぎやうで御座いますけれども、其御題に就いて存じて居ります事を何か申上げる事に致しましよう。は、子供の年中行事で御座いますか……。えゝ、それはもう挿絵も錦絵も澤山御座いましたとも……

子供の年中行事と申しませば、どう致しましてもまあ兩大關は雛の御節句と端午の御節句で御座います。それではいろ〳〵な歳事記や隨筆などを引合せまして、此の御節句の繪を少し御目にかける事に致しましよう。

一體雛の人形の元は、別に四季を定めずに、たゞの遊びとして小さい人形を飾りまして、今の姉様遊び見たい

第六圖

北尾政演筆「あやつりよりり」

な事を致しますのと、支那の年中行事を眞似まして三月の上巳即ち初めての巳の日に身代りの人形即ち天兒を河に流して御祓をして其人の祝福を祈りますのと、二つあつたやうで御座います。そして、後世には、つまり此の人形の姉樣遊びと紙人形の贖物とが、何時の間にか一つに成つて、今日の桃の節句と申します御雛祭りに成つたものらくし思はれます。で御座いますから今日の御雛祭りは、遊戯と祭祀とが合併したんで御座いましよう。

第七

菱川師宣筆

姉樣遊びの紙人形も古くから行はれたもので御座いまして、『枕草紙』にも『源氏物語』にも其他いろ〳〵の古書に多く出て居ります。三月上巳の祓の紙人形に致しましてもやはり古くから有つた儀式で御座いまして、『源氏物語』の須磨の巻にも見えて居ります。そして此の三月上巳が後に三月三日と變つたので御さいます。しかし三月三日が年中行事として特別に御雛樣の日になりましたのは、即ち遊戯と祭祀が合併しま

したのは、ずつと降つて天正頃（今から三百四十年も前）ぢやないかと京傳の『骨董集』などに見えて居りましたが、如何なものでは御座いましよう。

□

姉様遊びの人形の繪は、私の持ち合せ居ります本では、立圃が寛文十年（今から二百三十四年前）に編みまして、奥村政信が挿繪を致しました『おさな源氏』の紅葉賀の卷の繪が一番面白いと存じます。しかしこれは今申しましたやうに、別格子供の年中行事を畫いた繪と云ふ譯ぢや御座いませんから、略して置きます。

それから天兒（あつ）即ち稜（わた）の紙人形の繪として上乘なものは、どう致しましても文明十六年（今から四百三十三年前）の宗祇の抄本『自讃歌註』を、師宣の挿繪で元祿頃（今から二百三十年も前）に版行した三冊ものゝ内、上卷の口繪に成つて居る繪で御座いましよう（第七圖）。

此の繪の左の上を見ますと、遠くに稜をする河

「自讃歌註」より

圖

が流れて居ります。家の外には車と供人が待つて居ります。家の内には稜の御使役らしい一人の女房がこれから車に乗らうと云ふ所で、一人は河へ流す紙人形を捧げ、一人は此の儀式の主人公たる子供を抱いて居ります。ずつと奥の方には御簾の裡に母の女御が見えて居ります……

此の氣品のある挿繪の構圖は、何とも申されないほど雄大を極めたもので御座います。大切な小さい主人公を中心として、凡ての人物や建物の各部や器物や自然が、不思議なほど巧みに統一され居るでは御座いませんか。

□

今日の端午の御節句の起りと申しますものも、やはり隨分はつきり致しませんものらしう御座います。これにも、奈良朝・平安朝時代を中心と致しまして、支那に倣つて菖蒲や艾を祭つて御祝をした宮中及び一般の五月五日の節日と、武家時代頃から盛に成つたと思はれますが、菖蒲や艾の外に冑や武具を飾りまして、後にはこれを主にしまして男の兒の御祝をした御節句と二た通りあるやうで御座います。

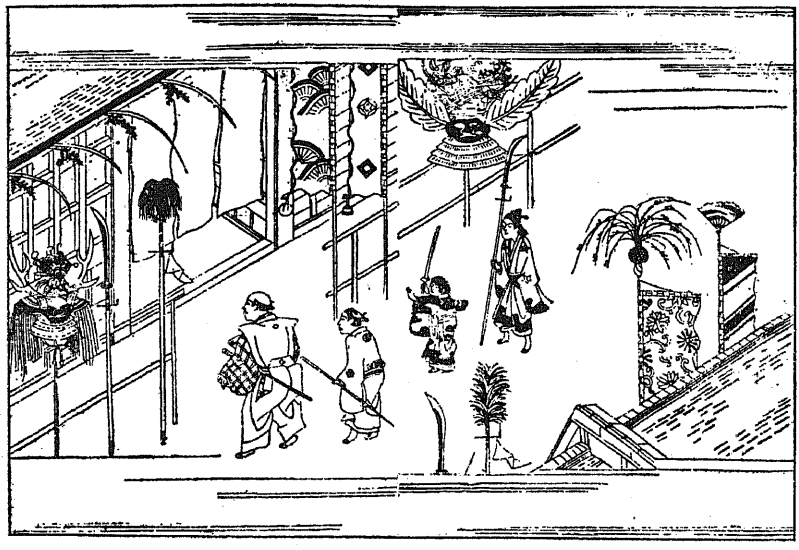
今日でこそ端午の御節句は男の兒の御祝ひのやうに成つて居りますけれども、明治六年に今日の大祭日が御取り極めになります前までは、やはり御正月や御盆のやうに一般の大祭日で御座いましたから、私共も存じて居りますが、江戸の町々では皆家業を休みまして、それは〳〵大騒ぎで御座いました。

つまり菖蒲と艾を祭つた一般の祭日と、武器を飾つた男の兒の御祝とが、何時の間にか同居して了つたと云ふ形に成つたので御座いますが、何時一般の御祝ひ日と云ふものゝ中に、此の男の兒の御祝ひ日がまぎれ込んで參りましたものか、一向に分らないやうで御座います。

支那では端午の節日には菊や吳茱萸と云ふやうな香氣の高い藥草を祭つて禍を拂ひ福を祈つたと

伺つて居りますが、それが、日本へ傳はりましてから、何時の間にやら菖蒲と艾に成つて了つたやうで御座います。『枕の草紙』などを見ましても、やはり此の草の香氣を述べて居ります。そして眞似と工夫で追々に菖蒲の縵（びんづら）とか藥玉とか菖蒲酒とか粽とか菖蒲湯とか申しますやうなものを作つて參りましたが、つまり一般の祝ひ日としての五月の御節句は植物を祭つて人間を幸にすると云ふ事が主眼に成つて居るので御座います。

第八圖



吉田半兵衛派筆「日本歳事記」より

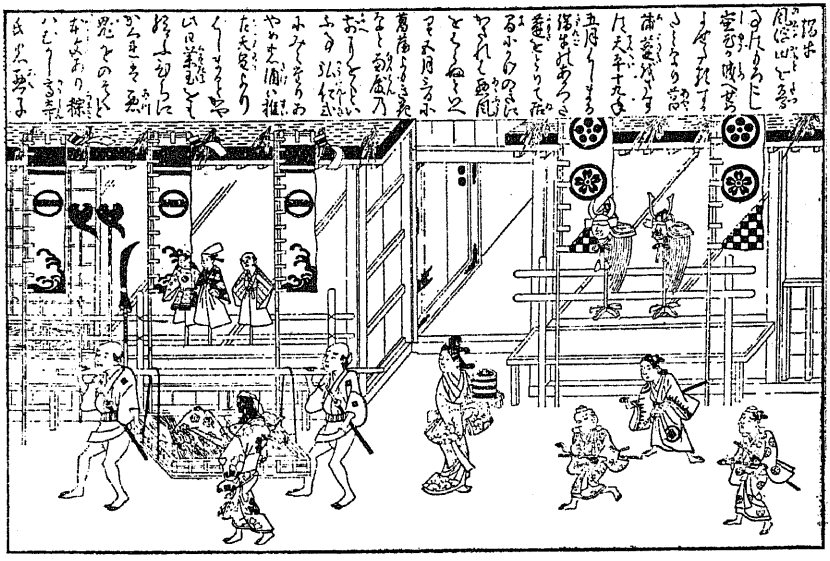
□

所が武家時代頃からで御座いましよう。何時の間にやら此の日に武具を戸外に飾つて男の兒の御祝ひを致すやうに成つて參りました。此の武具を飾ります起りと致しまして、よく藤森緣起が引かれますけれども、どうもこれは歴史上の證據の無い事らしう御座いますから、餘り頼りにはなりません。鎌倉時代の本には冑（かぶと）の花（又は花冑）とか冑人形とか申しまして、冑の上に花や人形を乘せたものを五月五日に飾つた

と出て居るやうで御座いますから、或はかう云ふものが遺つて後に傳つたものかも知れません。

私の覺えて居ります挿繪で、此の端午の御節句を畫きました古いものが二つ三つ御座いますから御目にかけましよう。どなたも御存じの貝原益軒の『日本歳事記』は貞享五年即ち元祿元年（今から三百二十九年前）に出たもので御座いますが、是に吉田半兵衞派の挿繪がありまして、其中に端午のが出て居ります（第八繪圖）此の當時は御覽の

第九圖



石河流宣筆「大和耕作繪抄」より

通り軒に菖蒲と艾をさし、花冑や槍や長刀や旗印を戸外に飾り、子供も槍や長刀を持つて遊んで居たものと見えます。

それから元祿頃に出ました石河流宣の『大和耕作繪抄』と云ふ繪本の中にも大變に面白い御節句の繪が御座います。第九圖を御覽になりますと、冑や武具や旗印などの外に、武者人形もありますから、もう此の時分には冑ばかりでなく、人形も飾りましたものと見えます。山伏姿を眞似した男の兒が遊んで居りますの

も、却々面白いと存じます。第十圖は御節句の勇ましい遊びを畫いたもので御座います。これは印地討と申しまして、村々又は町々の子供が兩方に分れまして互に飛礫を打ち合ふと云ふあぶない遊びで御座います。後にはこれが菖蒲打と名が變りまして、菖蒲を編んでしな〳〵する鞭のやうなものを造りまして打ち合つたさうで御座います。

兎も角も子供の年中行事としての端午の御

第十圖

石河流宣筆「大和耕作繪抄」より

節句と申しますものは主に戸外に武具を飾つたり、亂暴な遊びを致したものと見えます。徳川の後期や今日のやうに、家の内へ引込んで床の間や何かに小さい武者人形を綺麗に飾り立てたやうな女々しいものぢやなかつたらしう御座います。

□

年中行事でない一般の子供の遊びで御座いますか。それは有り餘るほど澤山御座いますから、何を取り出して申上げてよいか自分で

も丸で見當が付きません。そしてこれは挿繪よりも却つて飾繪の方に面白いものが澤山御座いますから……左樣で御座いますか、それでは挿繪の中で一寸變つて面白いやうなものを一つ二つ御目にかけましようか。

安永の初期（今から百三十年前）に出ました『きげん』と云ふ子供の繪本に、石川豐雅派の人が繪を畫いて居りますが其中から「のぞきからくり」と「水銀人形」の繪を先づ御覽

第十一圖

石川豐雅派筆「きげんよりし」

に入れます（第十一圖）。此の繪を見ますと此の時代の子供の屋内の遊戯が誠によく分るので御座いますが、殊に面白いのは此の繪の右の端に畫いてあります「水銀人形」で御座います。

私は子供の時分から此の機械の類が大好きで御座いまして、いろ〳〵な仕掛を弄つて見ては樂んで居りましたが、此の繪にある「水銀人形」の製法は寛政五年（今から百二十四年前）出版の『機巧圖彙』と云ふ本に精しく出て居ります。私は子供な

から此の本の序文が大變氣に入りまして、今でも初めの方は少しは覺えて居りますが、何でもこんな事が書いて御座いました。「夫れ奇器を製するの要は多く見て心に記憶し物に觸れて機轉を用ゆるを尊ぶ。譬へば魚の水中に尾を搖がすを見て柁を作り、翅を以て左右するを見て櫓を製するの類也諸葛亮孔明は妻の作れる偶人を見て木牛流馬を作意し、竹田近江は小兒の砂弄りを見て機關の極意を發明す。

此書の如き、更に兒戲に等しけれども、見る人の斟酌に依ては、起見生心の一助ともなりなむかし」。

第十二圖

甲　丙　乙　丁

「機巧圖彙」より

此の本には、掛ヶ時計櫓時計、枕時計、尺時計茶運人形、五段返、連理返、龍門瀧、皷笛兒童、搖盃、鬪鷄、魚釣人形、品玉人形などに亘つて、大變に精しい解剖的の圖解が澤山出て居ります。その中の五段返りと云ふのが第十一圖にある「水銀人形」の事で御座います。此の人形の圖解は三十圖にも亘りまして、大變に綿密に說明して御座います。大體は人形の胴に仕込んである水銀の重さで人形がつぎ〳〵に轉倒して下の段に立つやう

になりますので、今其三十圖の内から、四つばかり出して御目に掛かましよう。第十二圖の(甲)は其の立つて居る所、(乙)は後へ立つて手をついた所、(丙)は逆立をした所、(丁)は次の段へ降りる所で御座います。

□

繪も話も大變に理窟ぽくなりましたから、今度は滑稽な所を一つ御覽に入れませう。これは一寸伏線が要りますのですがえゝ、……先づこの方を先きに申しましよう

只今では道德觀の低い

第十三圖

西川祐信門人筆浮世漫畫より

本とやら申されて、大變に貫目が落ちましたやうに伺つて居りますが、昔はやはりどう致しましても、『つれ〴〵草』が我邦の論語とか申しはやされまして、まあ標準になる讀み物で御座いました。御存じのやうにあの本の初めの方に久米の仙人の事が一寸書いて御座います。私の持つて居りました本には、狩野派の挿繪のと、祐信の挿繪との兩方御座いまして、兩方共に此の久米の仙人が神通力を失つて墜落致します所が書いて御座いました

殊に元祿三年版の狩野派の挿繪のある方が出來が宜しう御座いました。洗濯をして居ります女も、ごく無邪氣な少女に成つて居りました、それに立木や石や河などが、狩野一流の古雅な簡素な筆づかひで、雲は模樣風な形雲を二重線にして畫いてありますので、大變に神々しい感じを起させました。所がこれと不調和に、仙人の墜落します形が遠近法から見ますと餘り無理に大きく畫いてありますので、大變に滑稽に感じました。

どう致しましよう、大變に長い前置を並べまして……其癖せ本論はほんのぽつちりなんで御座いますよ。それではいよ〳〵久米の仙人の話をもぢりました一口噺とこれを畫いた挿繪とを一寸目にかけまして、これで今日は御免を蒙りたいと存じます。

十三圖は寶曆十三年(今から百五十四年前)に出ました『浮世漫畫』と云ふ輕い本にある繪で御座いますが、これで當時の子供の凧遊びと若い娘の風俗などがかなりよく分ります。

繪師は多分西川祐信派の人で御座いましようか一寸御覽に成つた所では、石川豐雅や豐信らしい所もあり、又北尾派らしい所もありまして、却々作者の見當が付けにくい繪で御座います。つまりかう云ふ畫風が追々に理想化されて參りまして、第一圖に御目にかけましたやうな鈴木春信のやうな優美な繪に成つたので御座いましよう。

この凧と娘が久米の仙人とどう云ふ風に筋を引いて居りますか、繪の上の方に其一口噺が出て居りますから、御讀み遊ばして下さいまし。しかし今時の方は、續けて書いた平假名は羅馬字よりも讀にくいと仰せになるさうで御座いますから、何なら活字に組み直して御覽に入れましようか……

……